

張り枠文について

Über den Spannsatz

鹿児島 繁雄

桐蔭横浜大学法学部

2002年2月28日 受理

1. 序

定動詞後置の副文について、学校文法は「枠構造」(Satzklammer, Rahmenbau)で説明する。事典の説明は以下の通りである⁽¹⁾。

「統語意味が緊密につながっているシンタグマ (Syntagma 統語構造) を遠隔位置 (Distanzstellung) に分離して配置すること」「ドイツ語文の要素が、枠に入った単位のようにまとまっていること。

- (1) 動詞的 : Der Zug [traf in Köln ein]. (列車はケルンに着いた)
 (2) 名詞的 : [das alte Auto] (古い自動車)
 (3) 従属節 : Sie fand, [dass sie sich fast schon mit ihm anfreundete].
 (彼女は、自分が彼と既に親しくなっているのに気づいた)」

(1) は分離動詞、(2) は名詞句、(3) は副文である。この文を「張り枠文」と名付ける文法もある。(1) の分離動詞“ein | treffen”が何故、前綴り“ein”と動詞“treffen”に分離するのかを説明する用語として「枠」を用いる。文章の前後に枠をかける、という説明は実は何も説明しないのと同じである。分節として一つのまとまりをなす、ということのみに焦点をあて、何故前綴りのみが文末に残るのか

は、依然とし謎のままである。英語には分離動詞にあたるものはない。(3) は英語では“The train arrived at Cologne.”で、動詞“arrive”は本来ラテン語の“ad ripam”(川の土手へ)を動詞化したものである。ドイツ語の“ein”は“in”(・・の中へ)である。動詞の本来の構造は、「前置詞・動詞」となり同じである。しかし、何故ドイツ語だけは方向指示語が文末に残るのか、は全く問題になっていない。むしろ、「枠構造」は、この点の説明を覆い隠す便宜上の手段である。文法は、分離の前綴りを文末に置く理由に答えるべきである。分離動詞の前綴りは、独立した単語(前置詞・副詞・名詞・形容詞・動詞)で、前綴りと動詞が一体化した非分離動詞と決定的に異なっている。この点、新正書法は、小文字で書かれていた名詞を大文字で書くという、本来の姿に戻っている⁽²⁾。

(例)

(旧正書法)	(新正書法)
rad-fahren	Rad fahren (自転車に乗る)
Ich fahre rad.	Ich fahre Rad. (私は自転車に乗る)
weil ich gern radfahre	weil ich gern Rad fahre (自転車に乗るのが好きなので)

この場合は、目的語として“Rad”を文末に置く。英語の不定詞“to ride a bicycle”

Shigeo Kagoshima; Department of Law, Faculty of Law, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane, Aobaku, Yokohama 225-8502

は動詞・目的語の順番に並べる。ドイツ語の不定詞は目的語・動詞の順に並べる。この順番はそれぞれのことばに特徴的であり、またことばの型によって決まっている。日本語では、「登山」(動詞・目的語)と「山登り」(目的語・動詞)と両方の型が混在している。前者は中国語から由来し、後者は大和ことばの語順である。

しかし、このような混在は英語・ドイツ語に関しては有り得ない⁽³⁾。「もちろん、各国語には固定した文があるわけではなく、文形成の手段、すなわち、実現されるべき文のための手本があるにすぎないのである。単語が一共同体の言語に有効であるように、文型という手段もまた有効なのである。」

「彼女は、自分が彼と既に親しくなっているのに気づいた」

ドイツ語 : Sie fand, dass sie sich fast schon mit ihm [anfreundete].

英語 : She thought that she [became] almost friends with him.

英語は主文と同じ動詞・目的語の語順。ドイツ語は目的語・動詞と逆転している。しかも動詞を文末に置き、副文を表す特徴としている。この語順について歴史文法は「歴史的には印欧祖語における最も普通の動詞の位置である動詞の後置法をドイツ語は保存している」⁽⁴⁾と極めて簡潔に触れているだけである。この定動詞後置がどのような仕組みなのか、また定動詞後置をどのように説明しているかを通観し、その妥当性を考えることが小文の課題である。

2. 18世紀から現代まで

アーデルング⁽⁵⁾

「dass 1. 限定 (Zirkumskriptum) 先行する動詞の受動的対象だけを回りくどい言い回しによって、あるいは他の動詞を使って表す場合、ラテン語は普通「対格・不定詞」を用いる。Ich sehe, dass er kommt (彼が来るのが見える) ;Ich weiss, dass es nicht recht ist (そ

れは正しくない、と私は知っている) ; Das Gesetz besteht darin, dass man Gott liebe.

(人が神を愛することによって法は存立できる)

あるいは倒置法によって : dass es nicht recht ist, habe ich lange gewusst (それが正しくないことを、私は前から知っていた)

同様に状況を記述・説明するために :er that es, ohne dass er es wusste, (それと知らずに彼はそれをした)あるいは :ohne es zu wissen (意味は同じ) ; indessen, dass ich auf ihn warte (私が彼を待っているあいだ) ;es sind schon zehn Jahr, dass ich hier bin (ここに来てもう10年になる) ;o, dass du den Himmel zerrisest (天蓋を引き裂くとは何たること) ;ラテン語風に dass を取り去り不定詞を用いると、動詞によって指示された場合を除き、文は明瞭さを欠く。Wir glauben nicht möglich zu seyn. (私たちは不可能だと思う。私たちは可能だとは思わない。)

それにも拘わらず、語順が変われば、dass は省くことができる :ich höre, er wird kommen (彼が来ると私は聞いた) ;er hat mir sagen lassen, dass er hat nicht kommen können あるいは dass を省いて、er habe nich kommen können (彼は私に、自分は来られなかったと言わせた)

対象がまだ明確でない場合は接続法を用いる : ich rathe dir, dass du es nicht thuest (それをしないことを私は君にすすめる) ;ich bath ihn, dass er es thun möchte (私は、彼がそれをしないでくれるよう頼んだ) ; ich wünsche, dass du zu ihm gehest (君が彼の所へ行くように、私は望む)」

この文法書が発刊された18世紀後半は、ドイツ学芸の疾風怒涛時代である。しかし語学ではいまだに古典語がお手本であった。方法をあらわす「対格・不定詞」は、古高ドイツ語の時代にラテン語からの模倣から始まり、新高ドイツ語の時代に入ってからフランス語の影響によりさらに増殖した。普通は知覚動詞と用いる場合以外は非文法的で

ある。Ich sah ihn kommen. = dass er kommt (彼が来るのが見えた) 知覚動詞以外で「対格・不定詞」は「対格・現在分詞」が本来の用法であった⁶⁾。これもラテン語の直訳から由来する。Ich glaubte (vermutete) dich schlafen(schlafend). (君が寝ているものと私は思った) :sentimus ignem calere. (我々は火はあついと(いうことを)感ずる) :sentimus ignem calentem. (我々は火があつい(あつくなっている)の感ずる)

dass を省いた文が、主文と同じく正(主語・動詞)になるという解説は、動詞が接続詞の役割をもつ接続法であるので、dass 文の説明としては不適当である。

ハイゼ⁷⁾

アーデルングから約半世紀を経て、ドイツ語独自の実践的文法が生まれた。18世紀は古典語の視点からドイツ語を分類する暗黒の時代であった。しかし、ハイゼの時代はグリム辞典(1884～1933)以前の自由な時代でもある。つまり、辞書による品詞分類が絶対的な文法の基準にはなっていなかった。

辞典を作るには、単語が文の中でどのような役割をしているかを規定しなければならぬ。その基準が品詞に凝縮して含まれている。例えば、“zufrieden”(満足した)という2語からなる単語(zu+Frieden)を副詞にするか、形容詞にするかは、文法が決定しなければならない。

形容詞・副詞の二者択一をする場合、ドイツ語はある意味では大まかな基準で選択できる。形容詞は副詞としても用いるからである。しかし、その逆は有り得ない。副詞は形容詞として用いることが出来ないからである。“zufrieden”と同じ構造をもつ“zumute”(～の気がする)をクラッペンバッハ⁸⁾は形容詞と定義している。旧西ドイツの辞典はすべて副詞と定義している(Duden, Wahrig など)。

形容詞と副詞の違いは、それとともに用いる動詞によって分類する。形容詞は“sein(・・である)、werden(・・になる)、

bleiben(ずっと・・だ)”という連辞とともに用いられる。この3つの動詞以外と用いられれば、副詞である。

zufrieden : (形容詞) Er ist mit sehr wenig zufrieden.
(彼は非常に欲のない人である)

(副詞) Er lächelt zufrieden.
(彼は満足そうにほほえむ)

zumute : (形容詞) Mir ist sonderbar zumute.
(私は妙な気分だ)

(副詞) 用例なし

クラッペンバッハは、“zumute”が“sein”とだけ結ぶとして、形容詞に分類する。ドゥーデン文法⁹⁾では、動詞を分類の基準にしていけないようである。“zumute”は様態を示す語句と共に用いられるので、副詞と分類しているのであろうか。ドゥーデン文法は「文形容詞」(Satzadjektiv)という分類基準を用いる。

(例) 文形容詞 : ① Das Essen ist gut.
(食事はよい)

② Das Essen schmeckt gut.
(食事は美味しい)

①は明らかに形容詞、②は副詞である。しかしドゥーデン文法は両方、文形容詞と分類する。この形容詞は、述部形容詞または形容副詞である。“gutes Essen”(美味しい食事)のように格変化語尾を付ける場合だけ形容詞と認める、という立場である。これは形容詞の本来の意味(nomen adjectivum: 名詞を修飾するもの)に余りにも忠実である。La comida es buena. (=la buena comida) (食事は美味しい)のように連辞を使う場合にも女性語尾が付くスペイン語のようなならば、ドイツ語の“gut”も形容詞と認めよう、という立場である。(*Das Essen ist gutes.)

連辞とともに用いる単語は名詞・形容詞であると分類するだけで十分である。逆に無用な混乱を学習者に与えるもの、と考える。

ある意味で語尾の有る無しで形容詞・副詞を区別することは、単純だが、「文形容詞」という難解な用語を教える必要があるのだろうか。

“zufrieden”は“ein zufriedenes Leben”(満ち足りた生活)と語尾が付く場合は形容詞。“Das Leben ist zufrieden.”(生活は満ち足りている)は語尾がないので「文形容詞」とすべきであろうか。

形容詞・副詞と同じく、ドゥーデン文法は、粹構造に関しても、まったく無用の分類をしている。

さて、ハイゼに戻ろう。彼の文法の特徴はまったく品詞に縛られていない、という点である。前述の「文形容詞」を逆にした「形容詞文」(Adjektiv - Satz)とは関係文のことである。

「副文は、主文と副文が結合した文において、その文の主文と極めて類似した役割をする。拡張された単文において本来の文成分の補足・修飾のために付け加えられる単語が、単文あるいは、その本来の文成分と同じ役割をするように。そのような補足・修飾語は名詞(あるいは一般的に対象語)あるいは形容詞あるいは副詞で有り得る。故に、副文はそのような規定語の書き換えられた表現と考えられる場合、以下のように3種類の文で有り得る。

a) 名詞あるいは対象文

: ich fürchte, dass er krank ist(=ich fürchte sein Kranksein)(彼は病気だと思う)

b) 形容詞文

: mein Freund, welcher krank war (あるいは短縮して als Kranker), konnte nicht mitreisen.(=mein kranker Freund konnte nicht mitreisen)(病気の友人と一緒に旅行することができなかった)

c) 副詞文

: er konnte nicht mitreisen, weil er krank war(=er konnte

krankheitshalber nicht mitreisen)
(彼は病気のために一緒に旅行することができなかった)

解説文が難解である。副文であっても、主文の単語のどの部分に関係するか、という役割から考えると、名詞・形容詞・副詞の働きをする文は、品詞として扱おう、ということを行わんとしている。このような文の機能面からの柔軟な分類は、100年後のプリンクマン⁽¹¹⁾の機能文法を先取りしている。しかし、この書き換えは余り感心しない。書き換えは、文法自体ではなく、表現法の選択と伝達目的に関する問題である。“dass er krank ist”と“sein Kranksein”は同価ではない。後者は、動詞の名詞化による中性名詞である。しかし、実際に使うことは有り得ない。文法的に正しい文であっても、実際に使わない文は非文法的と扱う。例えば、動詞“leben”(生きる)と中性名詞“das Leben”(人生)は、同価ではない。

Ich fürchte, dass er noch lebt.(彼はまだ生きているのではないか)は、“Leben”を使って、“Ich fürchte, dass er noch am Leben ist.”と書き換えることは可能である。しかし、副文を名詞句に書き換えることはできない。
*Ich fürchte sein langes Leben.(私は彼の長命を恐れる)

「張り粹文」についてハイゼは、どのように取り扱っているのだろうか⁽¹²⁾。

(1) “dass”を「文冠詞」(Satz-Artikel)と命名し、「dass文」を、行為・事実・出来事・状態を表す抽象的な「名詞文」(Substantiv-Satz)と定義する。

(2) 問題を孕む文・疑問文を表す「文冠詞」は“ob”(・・かどうか)と定義する。

(例) (1) Ich weiss, dass er bei uns war.
(彼が我々のところにいたことを私は知っている)

(2) Ich frage dich, ob er bei uns war.
(彼が我々のところにいたかどうかを私は君に尋ねる)

「・・ことを、・・かどうかを」という事柄

を表す文をハイゼは抽象文と呼んでいる。一方、人・事物を表す文を、具象文と呼ぶ。(1) 人を表す場合は人を表す疑問代名詞 (2) 事物を表す場合は、事物を表す疑問代名詞の書き換えである。

- (1) Ich weiss nicht, wer der Schuldige ist. (誰が悪いのかを、私は知らない)
 (2) Es ist nur eines, was uns retten kann.
 (我々を救い得るところのものはたった一つのものだ)

抽象的名詞文は、主文の動詞だけではなく、名詞・形容詞にも支配される。その場合は名詞・形容詞に動詞の「力」があるという。

- (例) der Glauben, dass wir uns in einem besseren Leben wieder sehen werden (今よりましな暮らしぶりで再会するであろう、という思いは) Er ist nicht werth, dass man sich um ihn bekümmert. (彼は気にかかるに値しない男だ)

品詞という狭い枠を外し、自由な発想で品詞をより広い視野で捕らえ直すハイゼの文法は20世紀初頭の追従者リッパートを最後に途絶えてしまった。リッパートはハイゼのように過激に“dass”を「文冠詞」という名称を使わずに「接続詞になった代名詞 das (=dass の正書法は次第に形成された)⁽¹³⁾」という名称を用いている。しかし、解説は相変わらず文の書き換えに終始している。自らも認めているように、この書き換えは「それが不自然で、強引でないかぎり」という限定付きである。

- (例) Die Müsiggang verkürzt unser Leben, indem er unsere Kraft schwächt. (=durch Schwächung unserer Kraft)
 (無為は、我々の力を弱めることによって我々の人生を短くさせる)
 Dass unser Gott uns Leben gab, des wollen wir uns freuen. (=Des göttlichen Geschenkes unseres

Lebens)

(神が我々に命をお授けになられたこと、そのことを我々は喜びに思う)

3. “dass” の素性

“dass” は本来、指示代名詞 “das” から派生したことは一般的に承認されている。しかし歴史文法は、“dass” が主文の一部であって、副文には何の関係もない、という立場をとっている。一方ハイゼ、リッパートの学校文法は、一貫して副文を主文の文肢の一部であるという立場をとっている。そして、その文肢の役割を主文のなかで体系として分類している。

- (1) 歴史文法
 ベハーゲル⁽¹⁴⁾

「並列の接続詞から、その後従属の接続詞の大部分が生じた。接続詞 “dass” それがいま導入している副文に属するものではなく、もとは主文に属していた。“ich weiss, dass er lebt” (彼が活着していることを、私は知っている) は本来 “ich weiss das : er lebt” (私はそのことを知っている : 彼は活着している) である。

従属の接続詞の中には、並列された文の結合をすることのけっしてなかったものもある。それらのものには、そもそも結合の能力が備わっていないのである。そうした役割を果たすようになったのは、単なる偶然、すなわちそれらがある文の文頭に置かれ、その文がやがて従属文に変わったという偶然によるものにすぎない。この種の接続詞に属するのは “ob” で、古くは単に疑問文を導入するだけでなく、“wenn” (もし～なら) をも意味している。このいずれの場合も同じ一つの考え方が基礎となっている。すなわち “ob” はかつておそらくは “vielleicht, etwa” (ひょっとしたら) を意味する副詞であったろう。“wenn du Gott bist, so sage es uns” (中高ドイツ語では “obe du got bist”) = “sage uns, ob du Gott bist” (お前が神であるなら、そ

れを我々に言え = お前が神であるか、我々に言え)」

歴史的記述をする場合、現行のことばの使い方を解説する必要はない。歴史的経緯だけを説明することによって現在のことばの用法の背景を述べればよい。パウル⁽¹⁵⁾も基本的にはベハーゲルと同じ立場である。

「習慣上、副文の一部と見做されている代名詞・不変化詞は本来、主文に属している。

“daz=that、dass”は元来次に来る論理的従属文を指示した。本来、指示代名詞なので、1・4格は主語・目的語を表す。

(例)4格目的語:“Ich sehe, dass er zufrieden ist.”は“Ich sehe das, er ist zufrieden”(彼が満ち足りているのが分かる。私には分かる。彼は満ち足りている)

このように、主文より副文に引き入れられ、その結果、指示代名詞が接続詞に変化した。それによって、1・4格以外の2・3格も1・4格の形で転用している。

“Ich bin überzeugt (davon),dass du Schuld hast.(お前が悪いのだと、私は確信している) 下線部は1・4格だが、主文の“davon(da+von)”によって3格の役割を果たしている」

(2) 学校文法

リップパート⁽¹⁶⁾「今日でも民衆の使うドイツ語は、大抵表すべき内容を主文だけで表現する。(例)“Der hat den Schaden,der braucht für den Spott nicht zu sorgen.”(そいつは失敗した。そいつは自ら嘲笑を求める必要はない = 失敗すれば必ず嘲笑される)

文結合(主文を二つ並べたもの)において、最初の文は従属概念を表現している。故に文アクセントを若干失った。つまり先頭の指示代名詞も音の強さを失った。さらに動詞が文末に来た。“Der den Schaden hat”関係詞になった代名詞は後に“wer,so,welcher”によって置き換えられた。“Wer den Schaden hat, braucht・・・”

リップパートは、かなり強引に説明している。何故“der”が“wer”に変わるのか。動詞

が何故文末に来るのか、まったく合理的な説明をしていない。そもそも、主文が従属概念を表現しているのなら、何故主文が従属文に変わらなければならないのか、という素朴な疑問にすら答えていない。まず、副文ありきで、いかに主文が副文に変わった経緯を説明しても意味がない。“dass”が主文の一部でも、「文冠詞」でも実用上は大きな問題ではない。むしろ、“dass”が何を指示しているかを考える方が、文法自体にとって有益である。

主文・副文の組み合わせに現われる単語は、4つしかない。① daあるいはda+前置詞 ② es ③ dass ④ wasである。この内①、②は主文にあって副文を指示。③、④は副文にあって、主文を指示する。

① da:リップパートはこれを「予告語」(Deutewort)と呼び、主文においてあらかじめ副文の到来を告げる。

(1)“Wo ein Wille ist, da ist auch ein Weg.”
(意志あるところ、自ずと道は開ける)

(2) Zeige deine Reue dadurch, dass du dich bessert.(心改めることによって、悔恨の情を示せ)

(3) Wenn Sie es nicht wünschen, so verzichte ich darauf.(貴方がご希望でないならば、私は諦めます)

(3)の“so”は「条件文が先行する場合は、“da”よりも多く用いられる⁽¹⁸⁾」とあるが、(1)の例との比較から分かるように、条件文の先行が問題ではなく、“wo”の場合は“da”を、“wenn”の場合は“so”と係り結びのような関係にある。

② es:副文だけでなく、不定詞句も指示する。

(1) Es freut mich, Sie wieder zu sehen.

(2) Es freut mich, dass ich Sie wieder sehe.(再びお目にかかれて嬉しく思います)

(3) Sie sah es gern,wenn man Ihr Kind lobte.(彼女は、自分の子供が誉められるのを見ることを好んだ)

「es」は中高ドイツ語においては2格であった。その名残があるという。“Ich habe es (=dazu) Ursache. (それには訳がある) “Ich bin es(=damit) zufrieden.” (私はそれに満足している) ⁽¹⁹⁾ ③ dass: “da” の例文 dadurch・・dass/ “es” の例文 es・・dass 以外にも主文にある da+前置詞は、従属文である「dass文」と相互の呼応し、役割を確認している。

④ was : 全文を受ける “was” で、関係代名詞、疑問詞の “was” と役割が違っている。

- (1) Er spielt Geige, was ich nicht kann.
 (彼はバイオリンをひくが、私はひかない)
- (2) Er bat mich, einen Apfel holen, was ich tat.
 (彼がりんごを一つ持ってきてくれと頼んだので、そうした)

以上を踏まえて、次の例文は、どう解釈すればよいだろうか。

- (1) Sie tanzte, dass es eine wahre Freude war.
- (2) Sie tanzte was eine wahre Freude war.

(1) の “dass” は主文 “Sie tanzte” を指示している。本来、主文にあって副文を指示するはずの “es” は、副文に置かれている。この場合 “dass” は本来の指示代名詞 “das” の意味と、接続詞 “dass” を兼ねている。“es” は古い2格で “dazu” の意味であろう。つまり “Sie tanzte so. Das war eine wahre Freude.” とほぼ同じ意味であろう。(彼女は踊っていた。その様は本当に楽しかった = 彼女が踊っているのを見るのは本当に楽しかった)。(2) の “was” は単に前文全体を指示する。この場合、例えば、彼女は以前病気で、今は全快し、踊りを踊れるようになった。そのことを皆が喜んでいて、という状況が考えられる。

4. 動詞の位置

ドイツ語の副文の怪奇さは、副文において定動詞を文末に置くことによって、無限の長さの文を作ることができることに由来する。これと平行する現象は、落語の「寿限無」のように長い名詞を作ることができる造語法である。

“Donau · dampf · schiff · fahrts · gesellschaft” (ドナウ汽船会社) これに更に “Kapitän” (船長) を付けると、都合6つの名詞で一つ合成語を作ることが出来る。

さらに(1) 引用符、ハイフンを付ければ、文を一つの単語として扱うことができる。また(2) 他品詞を中性名詞にする手段は、文全体をも中性名詞と扱うこともでき、これこそ「文冠詞」である。プレヒト『三文オペラ』

- (1) Das ist der verdammte
 “Fühlst-du-mein-Herz-schlagen” Text,
 (あの忌々しい「わたしの心臓がドキドキしているのが分かる」という歌詞)
- (2) Das ist das “Wenn du wohin gehst, geh ich auch wohin, Johnny.” (「あなたが行くところに私も行くは、ジョニー」だ)

従属の接続詞に導かれた副文(緊張文、張り枠文)。これこそマーク・トウェインが、「ドイツの作家は、いったん潜ると、大海を渡って、動詞がででくるまで浮かびあがらない」と評した文である。ハインリッヒ・クライスト『ミヒヤエル・コールハース』: Es traf sich, dass der Kurfürst von Sachsen・・・この間60字・・・nach Dahme gereist war. (偶然のことに、ザクセン選帝侯は・・・・ゲームに旅行されたのでありました) さらに、ドイツ語では冠飾句という、冠詞と分詞の間に単語を詰め込む構造もある。

[Dieses denkende, sprechende und atmende Stück Jugend] wird in zwei Stunden eine Leiche sein. (「この考え、話し、呼吸してい

る一片の青春は」2時間後には死体になっているであろう)

Hier fanden wir eine Menge Personen, [die köstlichen Gemälde aufmerksam betrachtend] (ここには「貴重な絵画を入念に観察している」多くの人々がおりました) 「zu 不定詞句」も、右端の動詞に向かって、単語を連ねる。

“Es ziemt dem Mann, [tapfer zu sein.] =dass er tapfer ist (「勇敢であることは」男子にとって相応しい)

ドイツ人にとっては当たり前過ぎて問題にすらなっていない、この「遠心的」⁽²⁰⁾な、最後に出てくる名詞・動詞によって文全体の意味を決定する、その意味で読者に緊張を強いる語順は、一体どのようなメカニズムから生まれたのであろうか。この点に関して興味深い考察がある。

そもそも、ことばは線状である宿命をもっている。ヨーロッパのことばは左から右へ、日本語は上から下へも可能。ヘブライ語は左から右である。いずれにしても文の初めと終わりという順番を辿って行かざるをえない。さらに、ことばの発生の本質は、質問とそれに関する返事・答えにある。自問自答であれ、対話であれ、ことば成立の一つの要因である。パウルは述べる⁽²¹⁾「A: Wer hat gesiegt? B: Fritz hat gesiegt. (A: 誰が勝った? B: フリッツが勝った) Aに質問されたBには、Aの質問の最後“gesiegt”が残る。Bには「勝利を得たこと」(das Gesiegethaben)という表象が生れ、次に“Fritz”という表象を喚起する」

たしかに、完了の枠構造はドイツ語に独特の表現である。この文に「今日」という状況語をいれても、ドイツ語は“gesiegt”を最後に置く。

英語: “Who has won [today]?” ドイツ語: “Wer hat [heute] gesiegt?” (今日は誰が勝った?)

しかし、さらに何故Aの質問で、“gesiegt”を最後に置くのかという疑問は依然として

残る。この疑問を無視すると、まず不定詞が浮かび、それに主語を入れると文になる、というメカニズムはなかなか面白い指摘である。パウルの例は自動詞である。他動詞ではどうだろうか。

A: Was isst du? B: Ich esse Wiener Schnitzel.(A: 何を食べる? B: ウィーン風カツレツを食べる)

他動詞の場合Aの最後は、動詞ではなく、主語が残る。よって、パウルの説は整合性がない。質問の最後に動詞が来るから、答える側の最初の表象が動詞になるのではない。むしろ質問に対して答えるべき内容の優先順位によって表象が並べられると考えた方が、自然である。質問する側も、質問の優先順位に従って質問する。

A: Was? B: Wiener Schnitzel. (何? ウィーン風カツレツ。)という問答で情報として充分である。Bの優先順位は: Wiener Schnitzel / essen / ich である。これを文に改めると: “Wiener Schnitzel esse ich.” または “Ich esse Wiener Schnitzel.” となる。この優先順位によって並べた語群の内、最後の主語を除くと、まさに不定詞句になる。

“Wiener Schnitzel essen” zuを加えれば[zu 不定詞] “Wiener Schnitzel zu essen” (ウィーン風カツレツを食べること)。この不定詞句に主語を入れると”ich Wiener Schnitzel esse” さらに接続詞を加えると副文が出来上がる: “dass ich Wiener Schnitzel esse” (私がウィーン風カツレツを食べることは)

この頭の中で思い浮かべた語群は、優先順位をつけなければならない要素が増えれば増えるほど、主観的にならざるをえない。よって、文が動詞に向かって遠心的であるといえども、主観的に不必要な要素であると話者が判断すると、その要素は動詞の外側に置かれる。

このように考えると、ドゥーデン文法⁽²²⁾の前域・中域・後域という、主観を考察にいけない分類は、無味乾燥の誇りを免れ得ない。

前域は枠の前にある要素、中域は枠の内部、

後域は枠の外にある要素である。枠の説明では、主語・述語という概念は使わない。

(例) 主文

前域 中域 = 枠
Susanne [hat gestern für ihren
(主語) Freund ein Geschenk
ausgesucht]

Gestern [hat Susanne für ihren
(規定語) Freund ein Geschenk
ausgesucht]

Für ihren Freund
(規定語) [hat Susanne gestern ein
Geschenk ausgesucht]

Ein Geschenk [hat Susanne gestern für
(目的語) ihren Freund ausgesucht]

副文

中域 = 枠

[dass Susanne gestern für ihren Freund ein
Geschenk ausgesucht hat]

(ズザンネが昨日恋人のために贈り物を探したこと)

主文の場合、何故前域は、中域から要素を自由に移動できるのか。中域は絶対的ではなく、中域内の名詞を修飾する場合は、その名詞は後域、つまり枠外にでることもできる。このような疑問には一切答えずに、枠が絶対であって、自由な移動は認めない。まず理論があり、その理論に適合しない用例は取り上げていない。過去分詞が先頭に来る文章は充分文法的である。

Ausgesucht hat Susanne gestern für
ihren Freund ein Geschenk.

注

- (1) ドイツ言語学辞典 S.819 (紀伊国屋書店、1994)
言語学小辞典 S.115 (同学社、1985)
- (2) Duden : Die deutsche Rechtsschreibung S.788、43 (Biblio - graphisches Institut、2000)
- (3) Weisgerber、L. : Grundzuge der inhaltbezogene Grammatik S.4

(Dusseldorf 1962)

- (4) 前島 儀一郎 : 英独比較文法 S.103~ 104 (大学書林 1987)
- (5) Adelung、J.Chr.:Umständliches Lehrgebaude der Deutschen Sprache S.483~ 484 (Leipzig 1782;Nachdruck Georg Olms 1971)
- (6) 桜井 和市 : 「分詞・不定詞・話法」 S.23 (白水社 1959)
松平 千秋 : 「新ラテン語文法」 S.176 (南江堂 1990)
- (7) Heyse,J.Chr.A.:Theoretisch - praktische deutsche Grammatik I S.871 (Hannover 1838;Nachdruck Georg Olms 1972)
- (8) Klappenbach、R.:Worterbuch der deutschen Gegenwartsprache S.4491 (Akademie Verlag 1981)
- (9) Duden :Die Grammatik S.582 (Bibliographisches Institut 1984)
- (10) Heyse :ibid
- (11) Brinkmann、H.:Die deutsche Sprache、Gestalt und Leistung (Dusseldorf 1962)
- (12) Heyse:ibid S.636~ 637
- (13) Lippert,R.:Lehrbuch der Deutschen Sprache S.29~ 30 (Leipzig 1914)
- (14) Behaghel,O.:Die deutsche Sprache (Max Niemeyer、Halle 1958;「ドイツ語学概論」 S.213~ 214 白水社 1972)
- (15) Paul、H.:Prinzipien der Sprachgeschichte S.299 (Max Niemeyer,Tubingen 1995)
- (16) Lippert:ibid S.30
- (17) derselbe:ibid
- (18) 岩崎 英二郎 : ドイツ語副詞辞典 S.160 (白水社 1998)
- (19) 相良 守峯 : ドイツ文法 S.100 (岩波書店 1977)
- (20) Brinkmann、H.:ibid S.509
- (21) Paul,H.:ibid S.122~ 123
- (22) Duden:Die Grammatik S.717~ 722